

# 恭仁京讚歌

— 福麻呂歌集歌と懷風藻詩との交流 —

太 田 善 之

## 一 叙景への偏り

都を和歌に詠むにあたって、特に新都であればなおさら、そこに帝都讚美ひいては天皇讚美の主題が存在することは至極当然のことであろう。万葉集には数多くの帝都讚美の歌が見られ、その歌々のそれぞれに帝都讚美の主題を達成すべく言葉が尽くされている。本稿では、巻六福麻呂歌集所収の恭仁京讚歌について、その主題がどのように達成されようとしているかを見てゆくこととする。

便宜上、「讚久迓新京歌二首并短歌」と題される二つの長反歌群のうち第二長歌から見よう。

わご大君 神の命の 高知らす 布当の宮は 百樹な  
る 山は木高し 落ち激つ 瀬の音も清し 鶯の 来  
鳴く春べは 巖には 山した光り 錦なす 花咲きを

をり さ男鹿の 妻呼ぶ秋は 天霧らふ 時雨をいた  
み さ丹つらふ 黄葉散りつつ 八千年に 生れつが  
しつつ 天の下 知らしめさむと 百代にも 易るま  
しじき 大宮所 (⑥一〇五三)<sup>(1)</sup>

「高知らす布当の宮は」と宮が提示され、その土地の山と川との様子が描かれる。続いて、「鶯の来鳴く春べは」「さ男鹿の妻呼ぶ秋は」と春秋の対がなされている<sup>(2)</sup>。春秋の対は人麻呂の吉野讚歌などに見られ、円環する時間として一年を叙する形式であり、ここでは春の景物として鶯・巖・花が、秋の景物として鹿・時雨・黄葉が詠まれている<sup>(3)</sup>。一首全体としてはこれらの景を持つ「大宮所」の永続性を讚えて詠み終わる。一見すると非常にありふれた讚歌と見えるが、同様に春秋の対を持つ人麻呂の吉野讚歌 (①三八) では「春べは花かざし持ち 秋立てば黄葉かざせり」

の対が「山神の奉る御調」として詠まれており、次に「逝き副ふ川の神も 大御食に仕へ奉ると」と詠まれるように山や川やの神の奉仕する姿を詠むことが吉野をほめたたえる根拠となっている。対して、福麻呂歌集歌では春秋の対は単に景を叙するために用いられているように見える点が異なっている。

万葉集に見られるもう一群の恭仁京讚歌に目を移して見よう。

山背の 久迹の都は 春されば 花咲きををり 秋されば 黄葉にほひ 帯せざる 泉の川の 上つ瀬に 打橋わたし 淀瀬には 浮橋渡し あり通ひ 仕へまつらむ 万代までに (⑩三九〇七)

#### 反歌

楯並めて泉の川の水脈絶えず仕へまつらむ大宮所 (⑪三九〇八)

右天平十三年二月右馬頭境部宿禰老麻呂作也

この長歌においても、先の一〇五三歌と同様に「春されば花咲きををり 秋されば黄葉にほひ」と春秋の対が詠まれるが、三九〇七歌は「あり通ひ仕へまつらむ万代までに」へと、つまり奉仕の永続性へと収束している。このように大宮人の奉仕の姿を描く万葉和歌は他にも多く見られる。たとえば先の人麻呂の吉野讚歌などが著名であろう。

三六歌において「百磯城の大宮人は 舟並めて朝川渡り 舟競ひ夕川渡る」が大宮人の奉仕の様として描かれており、それは「この川の絶ゆることなく この山のいや高知らず 水激つ滝の都は 見れど飽かぬかも」と宮の永続性へと収束している。つまり、大宮人の奉仕の姿を描くことが宮をほめたたえる根拠となっているのである。三九〇七歌においても、奉仕の永遠を述べることで恭仁京讚美の主題を達成していると言える。この辺りに、福麻呂歌集歌との違いを確認しておく。

このように見てくると、福麻呂歌集歌の独自性とは帝都讚美の主題の達成の仕方にあると言える。言い換えれば、どのように帝都の永遠を述べるかということである。人麻呂の吉野讚歌や境部老麻呂の恭仁京讚歌が大宮人の奉仕や山川の神の奉仕を述べることを根拠にしたのに対して、福麻呂歌集歌は叙景への偏りが見られ、それらの景物に恭仁京を讚美する根拠を求めているのである。

やや詳しく述べよう。三六歌では「宮柱太敷きませば」という天皇の行為に対応して大宮人の奉仕する様が「滝の都」の素晴らしさの根拠となっている。境部老麻呂の恭仁新京歌でも、自らの永遠の奉仕を表明していることは先に確認したとおりである。また三八歌では「国見」という天皇の側の行為に対応して現れたのが山や川の水の神の奉仕の様

である。これは「国見」に対応して現れた始源の吉野の姿であり、それゆえ吉野の素晴らしさの根拠となる。これらの歌には天皇の行為と奉仕の様という対応構造が見られ、大宮人や神の奉仕の様が現在を保証する根拠として機能している。一方、福麻呂歌集の恭仁京讃歌では、大宮人や神々を主体とする表現は見えない。しかも、一〇五三歌においては「百代にも易るましじき大宮所」とその宮を叙するところで歌が終止しており、それに対する詠み手の側の行為や想いは詠まれていない。第一長歌の一〇五〇歌においても同じような傾向が見えるが、それについては次節で詳しく述べる。ひとまずまとめおけば、福麻呂歌集所収の恭仁京讃歌が讃える根拠としたものは天皇が宮と定めた「布当の宮」の景そのものと考えられるほかないということである。それが先に述べた叙景への偏りということである。

## 二 恭仁京讃歌と山水詩

福麻呂歌集の恭仁京讃歌の第一長歌は次のように詠まれている。

現つ神 わご大君の 天の下 八島の中に 国はしも  
多くあれども 里はしも 多にあれども 山並の 宜  
しき国と 川次の たち合ふ郷と 山城の 鹿背山の  
際に 宮柱 大敷き奉り 高知らす 布当の宮は 川

近み 瀬の音ぞ清き 山近み 鳥が音とよむ 秋されば  
山もとどろに さ男鹿は 妻呼び響め 春されば  
岡辺もしじに 巖には 花咲きををり あなおもしろ  
布当の原 いと貴 大宮所 うべしこそ わご大君は  
君がまに 聞し給ひて さす竹の 大宮此処と 定め  
けらしも (⑥一〇五〇)

ここでは現つ神である大君の支配する八島の中から鹿背山が選ばれ、そこに造営された「布当の宮」が提示され、以降「布当の宮」の景の表現となっている。そこは山も川もあり、秋には鹿が、春には花がさき乱れる場所であった。それに対する詠み手の想いが「あなおもしろ」「いと貴」である。それによって「うべしこそ」と納得がいくのである。こう考えると、詠み手の想いが詠まれる点で一〇五三歌とは異なつて見えるが、「うべしこそわご大君は 君がまに聞し給ひて さす竹の大宮此処と 定めけらしも」へと続く構成からは、詠み手の想いによって、天皇が大宮を定めた根拠を確認していることになる。大宮人や神々の奉仕の様は詠まれていないが、天皇が大宮を定めた根拠こそが景の素晴らしさであったということになる。つまり、この一〇五〇歌も一〇五三歌と同じく叙景への偏りを見せているのである。

一方、一〇五〇歌に類似した歌に金村の吉野讃歌がある。

養老七年癸亥夏五月幸于芳野離宮時笠朝臣金村作  
歌一首并短歌

滝の上の 御舟の山に 瑞枝さし 繁に生ひたる 榊  
の樹の いやつぎつぎに 万代に かくし知らさむ  
み吉野の 蜻蛉の宮は 神柄か 貴くあらむ 国柄か  
見が欲しからむ 山川を 清み清けみ うべし神代ゆ  
定めけらしも (⑥九〇七)

この長歌では、「山川を清み清けみ」と景の素晴らしさが詠まれ、「うべし」と受けるように、それが宮を定めた根拠となつている点、構成の上でも語句の上でも非常に似通つている。しかし、九〇七歌では過去から現在への連続こそが重要視されている。そのことは末尾の「うべし神代ゆ 定めけらしも」に端的に現れている。これは吉野が聖武朝における「天武王朝皇統意識への回路」となることによる表現であり、単純に時間経過を示すとは言い切れない側面を持つ。一方、元明・聖武天皇による甕原行幸は続日本紀にも見られ、恭仁京遷都から約三十年ほど前のことではあるが、福麻呂歌集の恭仁京讚歌が時間の経過を根拠にした詠みぶりになつていないことは既に指摘したとおりである。恭仁京讚歌が過去からの永続を根拠としないことに、逆に現在の景を叙することへの偏りが見えてくる。また、叙景表現に注目すると、九〇七歌が「山川を清み清け

み」であるのに対し、一〇五〇歌では叙景に多くが割かれている点に大きな特徴がある。

ただし、金村の吉野讚歌の反歌には、

年のはにかくも見てしかみ吉野の清き河内のたぎつ白  
波 (⑥九〇八)  
山高み白木綿花におちたぎつ滝の河内は見れど飽かぬ  
かも (⑥九〇九)

或本反歌曰

神からか見が欲しからむみ吉野の滝の河内は見れど飽かぬかも (⑥九一〇)

み吉野の秋津の川の万代に絶ゆることなくまたかへり  
見む (⑥九一一)

泊瀬女の造る木綿花み吉野の滝の水沫に咲きにけらず  
や (⑥九一二)

と詠まれ、「たぎつ白波」「おちたぎつ滝の河内」など叙景へ傾いている要素がなくもない。また「(白)木綿花」なども波を花に喩えた表現であるにせよ、景物を叙していると言つてもよいだろう。この辺りに、福麻呂歌集の恭仁京讚歌の淵源をひとまず見ておきたい。

つまり、吉野讚歌においても見られた叙景への傾き、それを積極的に引き受けたのが福麻呂歌集である。それでありながら、この福麻呂歌集には万葉和歌の叙景表現の

水脈と同時に、漢文脈の景物描写からの流れも見て取れるのではないか。

再び一〇五〇歌に戻れば、恭仁京（布当の宮）とは「山並の宜しき国と 川次のたち合ふ郷」とされている。「川近み瀬の音ぞ清き 山近み鳥が音とよむ」と再び山と川とが用いられるのは、それが清なる自然の表現だからと考えるべきだろう。中西進は「清き河内——吉野歌の問題——」で吉野をめぐる詩歌について、つぎのように述べている。

吉野讚美は「清」なる地——仙境としての吉野讚美であり、そこに奈良初頭の吉野歌の占める位置がある。またその制作の場も詩歌ともども応詔の場であったが、一層内容的に立入っても、知水仁山という山と水とに仮托した讚美であり、清なる仙境であり、柘枝伝説を語り、古昔以来の仙境視をもつという諸点において、この両者は悉く一致しているのである。

吉野を仙境と見なす觀念が詩と歌とに共有されたことを語っている。それを実現する表現が山水の清らかさを詠むことだとの指摘である。この山水の文学という問題を深めたのが辰巳正明である。辰巳は「万葉集と山水文学」<sup>10</sup>において、山水文学が吉野に限らず、広く行幸・遊覧の場において詠まれていることを指摘し、そこに天皇讚美が主題とされていることを中国文学との対応において考えている。

このことは恭仁京讚歌の叙景表現を考えるにあたっても示唆的である。また一〇五三歌においても「百樹なる山は木高し 落ち激つ瀬の音も清し」と山と川とが詠まれ、春には「鶯・巖・花」が、秋には「鹿・時雨・黄葉」が詠まれる。両長歌の叙景表現において、春の「巖」と「花」、秋の「鹿」が一〇五〇歌と共通しており、清らかな山や川のある場所での「巖・花・鹿」が恭仁京讚歌の核にあるということになる。

この二首の長歌に共通する「山・川」とその山川をめぐる春の「巖・花」秋の「鹿」、そうした清らかな山水からは、当該二首も山水文学の流れに位置づけられることになる。つまるところ、山水を描くことで、天皇を讃えてゆくことになるのだということである。しかしながら、そのような理念を背負ったとき、せり上がってくる福麻呂歌集の叙景への偏りはどのように説明しうるのか、先に挙げた問題である。あらためて、一〇五三歌の表現を見ていきたい。

鶯の 来鳴く春べは 巖には 山した光り 錦なす  
花咲きををり

この部分が春の叙景表現である。ここでは巖と花とが春の核として詠まれているが、この巖と花のある景は、たとえば懐風藻詩によく見られるところである。

飛文山水地、命爵薛蘿中。

文を飛ばす山水の地、爵を命す薛蘿の中。

漆姫控鶴拳、柘媛接魚通。

漆姫鶴を控きて挙り、柘媛魚に接きて通ふ。

煙光巖上翠、日影澗前紅。

煙光巖の上に翠にして、日影澗の前に紅なり。

翻知玄圃近、对翫入松風。

翻りて知る玄圃の近きことを、对翫す松に入る風。

(三二・藤原史「五言遊吉野二首」)

この詩で「山水」とまず山と水とが示されるのは、山水文学の伝統上にあることを意味していよう。五・六句では松の生えた巖と花の咲いた岸辺とが詠まれている。つまり、三一詩では山水の景が、松と花と巖と岸というように具体化されている。あるいは、

水底遊鱗戯、巖前菊気芳。

水底に遊鱗戯れ、巖前に菊気芳し。

(六六・田中浄足「五言晚秋於長王宅宴一首」)

の詩は、晩秋の長屋王邸宅の景であり、「巖前菊気芳」と巖と菊の景が詠まれている。ここにも巖と晩秋の花である菊との取り合わせが見える。なお、ここでの「水底」と「巖前」とは大きく言えば山と水とに対応している。さらに、長屋王の作宝楼詩では、

景麗金谷室、年開積草春。

景は麗し金谷の室、年は開く積草の春。

松烟双吐翠、桜柳分含新。

松烟双びて翠を吐き、桜柳分きて新しきことを含む。

む。

嶺高閣雲路、魚驚乱藻浜。

嶺は高し閣雲の路、魚は驚く乱藻の浜。

激泉移舞袖、流声韵松筠。

激泉に舞袖を移せば、流声松筠に韵く。

(六九・長屋王「五言初春於作宝楼置酒一首」)

とある。三・四句目において松や桜や柳が詠まれ、五句目に「嶺」とある。この「嶺」は対によつて明らかかなように山水の景を描いており、「山」に対応することから巖と類似するものと考えられる。この詩では巖や激泉、松や桜や柳のある景が詠まれている。このように、巖と花のある景は懐風藻詩によく見られるが、特に次の詩に注目してみたい。

錦巖飛瀑激、春岫暉桃開

錦巖飛瀑激き、春岫暉桃開く。

不憚流水急、唯恨盞遲来

流水の急きことを憚れず、唯盞の遅く来ることを

恨むらくのみ。

(五四・山田三方「五言」三月三日曲水宴一首。)

五四詩は「三月三日曲水宴」の詩で、三・四句は王羲之の蘭亭序で知られる曲水流觴の故事による表現である。ここでは一・二句の叙景表現に注目してみたい。「巖」と「岫」によって山が、「飛瀑」によって水が詠まれると共に、「暉桃」とあるように照り輝くような桃の花が詠まれている。ここにも巖と花との組み合わせの叙景表現がある。「錦巖」は漢語として見出し難いが、錦のように美しい巖とも、花の錦をまとった巖ともとれる。この問題については後述するが、後者であれば一〇五三歌の「巖には山した光り 錦なす花咲きををり」との対応は非常に明確になる。特に「錦」の語があることは重要で、万葉集において「錦」を景の修飾として用いた歌は一〇五三歌以外には、「山辺の五十師の御井はおのづから成れる錦を張れる山かも」(⑬三三三三五)しかない。この歌は「五十師の御井」を自然に錦を張った山と見立てた歌で、花や紅葉をたとえたとする説(沢瀉注釈等)や女官をたとえたとする説(講談社文庫)があり、いずれの解を採るか俄に決めがたいが、「錦」を景の修飾とする表現が万葉集において数少ない表現であることは確かであり、したがって、ここに懐風藻の五四詩の表現を措定してもよいのではないだろうか。そこには、万葉和歌が懐風藻漢詩と交流した姿が見える。この

交流の意味を解くために、懐風藻詩において花と巖の景が意味するものを探る必要がある。

### 三 錦巖と神仙の都

山田三方の五四詩は「三月三日曲水宴」での詩である。三月三日の曲水宴とは中国において本来水辺での祓に端を発する行事で、「桃」を邪気払いとして重要視したことから、西王母や桃源郷などと結びついて神仙世界と深く交渉を持つものである。この辺りを手掛かりに懐風藻詩を見てゆくことにする。たとえば、調老人の「五言三月三日応詔」はこのように詠んでいる。

玄覽動春節、宸駕出離宮。

玄覽春節に動き、宸駕離宮に出づ。

勝境既寂絶、雅趣亦無窮。

勝境既に寂絶にして、雅趣も亦無窮にあり。

折花梅苑側、酌醴碧瀾中。

花を折る梅苑の側、醴を酌む碧瀾の中。

神仙非存意、広濟是攸同。

神仙意に存くるに非ず、広濟是れ同じくする攸ぞ。

鼓腹太平日、共詠太平風。

腹を鼓つ太平の日、共に詠ふ太平の風。

この詩は一・二句で天皇の行幸を示し、行幸の場所を「勝地」と捉えている。これは先に見た山水の情景を広く押さえた表現であろう。神仙世界との関わりを示すのは、七・八句である。「敢えて神仙に成ろうと望むのでなく、一切の人々を広く救おうと君も臣も同じく努力しよう」の意となる。七句目が詠まれることに注目すれば、逆に三日と神仙世界との関わりが一般的な理解であったことが見て取れる。ことは懷風藻に限ったことではない。万葉集の漢詩にも三月三日と神仙世界との関わりを示すものがある。

余春媚日宜怜賞、上巳風光足覽遊。

余春の媚日は怜賞れぶに宜く、上巳の風光は覽遊するに足る。

柳陌臨江纒袂服、桃源通海泛仙舟。

柳陌は江に臨みて袂服を纒にし、桃源は海に通ひて仙舟を泛ぶ。

雲疊酌桂三清湛、羽爵催人九曲流。

雲疊に桂を酌みて三清を湛へ、羽爵は人を催して九曲に流る。

縦酔陶心忘彼我、酩酊無処不淹留。

縦酔に心を陶して彼我を忘れ、酩酊し処として淹留せぬはなし。

卷十七に見える天平十九年三月四日の大伴池主「七言晩春遊覧一首」である。ここでは、「桃源」「仙舟」の語に明らかかなように曲水宴の景を桃源郷や仙舟といった神仙世界として表現する。このように見てくると、山田三方「三月三日曲水宴」の詩の景も神仙世界の景と考えられる。

さらに、三方詩と福麻呂歌集歌とをつなぐ「錦巖」の語とは何であるか、その問題を考えてみよう。

漢語に「錦巖」の語は今のところ見当たらない。一方、和語としての「いはを」は、

春草は後は落易らふ巖なす常磐に坐せ貴きわが君(⑥)  
九八八)

神さびて巖に生ふる松が根の君が心は忘れかねつも  
(⑩三〇四七)

などと万葉集にある。九八八歌では「巖なす」が「常磐に」に掛かっているので、「いはを」は永遠性を示していることになる。また、三〇四七歌では序詞の中に、時間の経過（「神さび」）によっても変わらないものとして「松」と共に「巖」が詠まれている。このように、和語の「いはを」は永遠性を示す語として用いられていることが知られ、福麻呂歌集歌も和語の「いはを」のイメージを抱えているだろう。ただ、ここでの「巖」が単に永遠性を表すのではなく、それが「錦巖」であるところにさらに特別な意味が含



まれているように思われる。「錦巖」と同じ枠組みを持つ漢語としては「錦石」の語が、梁の庾肩吾の「奉和太子納涼梧下応令詩」に見える。<sup>14</sup>この詩は、「芸文類聚」にも見えることから日本で享受される可能性は充分にある。その詩には、

懸門開溜水、錦石鎮浮橋。

懸門は溜水を開き、錦石は浮橋を鎮ふ。

黒米生菰葉、青花出稻苗。

黒米は菰葉に生じ、青花は稻苗に出づ。

無因学仙藻、雲気徒飄飄。

仙藻を学ぶに因し無く、雲気は徒らに飄飄す。

とある。初めに納涼のための行幸があつたこと、山に琴曲が満ち、その琴は鳳凰の住むという梧桐で出来ていることなどが述べられ、この場を讚えている。「錦石」の語はこれに続いて見られ、訳出すれば「上下するしくみのある門は溜まった水を流し、美しい石は浮き橋を押さえる」となる。ここでの「錦石」とは美しい石という意味であり、美称としての使われ方に近いものと思われる。また十一句目に「仙藻を学ぶに因し無く」とある。「仙藻」は、ここでは仙人になるための書物の意であろうと思われ、「もはや仙人になるための書物など必要なく」という意味で、この場が神仙世界であることを意味するものと考えられる。

また、北周の庾信の「奉和趙王遊仙詩」には、

山精逢照鏡、樵客值圍碁。

山精照鏡に逢ひ、樵客圍碁に値ふ。

石紋如碎錦、藤苗似乱糸。

石紋碎錦の如し、藤苗乱糸に似る。

蓬萊在何処、漢后欲遙祠。

蓬萊何処にか在る、漢后遙祠せんとす。

と詠まれ、「碎錦」の語が見える。山にこもつて仙葉を採り、遂に師につくことができたこと、仙人となった人物の故事が述べられ、「玉京」（道家で天帝の棲むところ）や「太乙」（天帝のこと）が詠まれるのに続く六句の部分に「石紋碎錦の如し」の句がある。この「碎錦」は「碎いた錦」のことを指し、「石の紋様はまるで錦を碎いたかのよう」に美しいの意である。後の句に「蓬萊何処にか在る」とあることから「石紋如碎錦」は神仙世界の景であることが示されている。これら「錦石」や「碎錦」が神仙世界の景の表現となつてゐることは、三方詩にとつても重要であり、「錦巖」が錦のような巖であるとすれば非常に近い例となる。

ただし、三方の詩があくまで「石」でなく「巖」である点をもう少し考えてみたい。「錦巖」の語を構成する「錦」と「巖」とに分けて懷風藻の用例を探してみると、

登望繡翼徑、降臨錦鱗淵。

登りて繡翼の徑を望み、降りて錦鱗の淵に臨ます。

(二〇・巨勢多益須「五言春日底詔二首」)

笛浦棲丹鳳、琴淵躍錦鱗。

笛浦丹鳳棲まひ、琴淵錦鱗躍る。

(二一九・葛井広成「五言奉和藤太政佳野之作一首」)

天霽雲衣落、池明桃錦舒。

天霽れて雲衣落ち、池明らかにして桃錦舒く。

(九四・藤原万里「五言暮春於弟園池置酒一首并序」)

などとあり、まず「錦鱗」の「錦」は魚の美称として用いられている。一方、九四詩の「桃錦」は桃の咲いている様子を錦に喩えている。これに従えば、三方詩の「錦巖」は花の錦をまとった巖の意となる。

また、「巖」が吉野詩において神仙世界の景物として用いられていることを月野文子<sup>(16)</sup>が既に指摘している。それを確認するあたりから始めよう。先に挙げた三一詩に「煙光巖上翠、日影滯前紅。翻知玄圃近、对翫入松風。」とあり、松の生えた「巖」や花の咲き乱れる岸辺が「玄圃近」、つまり崑崙山にあるという仙人の住居に近い景であることを示している。このことは神仙世界として「巖」のある景が表現される場合のあることを示している。また、

峰巖夏景変、泉石秋光新。

峰巖夏景変はり、泉石秋光新し。

此地仙靈宅、何須姑射倫。

此れの地は仙靈の宅、何ぞ須るむ姑射の倫。

(七三・紀男人「五言扈從吉野宮一首」)

の詩においても吉野の夏から秋への変化が詠まれ、その「峰巖」の景は後句に「此の地は仙人の家であり、どうしてこれ以上神仙の仲間が必要だろうか」と、先の例と同様に神仙世界の景物として「巖」が詠まれている。これらの二例はいずれも吉野詩であり、吉野を神仙世界と見なす日本詩歌に共通の発想に因っていると考えられる。また、「巖」は吉野詩以外にも、

試出霏塵処、追尋仙桂叢。

試みに霏塵の処を出で、追ひ尋ぬ仙桂の叢。

巖谿無俗事、山路有樵童。

巖谿俗事無く、山路樵童有り。

(二〇八・民黑人「五言幽棲一首」)

と見える。「霏塵処」を出で、「仙桂叢」を求めるのであり、この例からは吉野でない場合にも神仙世界の景物として「巖谿」を詠む場合のあることが知られる。さらにもう一例挙げれば、

姑射遁太寶、崆巖索神仙。

姑射に太寶遁れ、崆巖に神仙を索む。

(二〇・巨勢多益須「五言春日応詔一首」)

の「崆巖」は、字義通りに解すれば、峻しい巖を指し、小島大系には「黄帝が広成子について道を学んだ山」と指摘されている。「神仙を索む」とあることから、神仙のいると思われる場所が「崆巖」であったことがわかる。

また、三方詩で「錦巖・春岫」とあるように「巖」と「岫」とは、深く関連する景物であったと思われる。

浮雲鬢鬢繁巖岫、驚颯蕭瑟響庭林。

浮雲鬢鬢として巖岫を繁り、驚颯蕭瑟として庭林に響く。

(二二・紀古麻呂「七言望雪一首」)

とある。「巖岫」は巖の洞穴を指し、「巖岫土」の語が隠遁者そのものを指すように、「巖岫」の語は神仙世界の景物としてかなり熟した表現であった。<sup>16)</sup>

これらの懐風藻詩の例からは、神仙世界の景を描く際に「巖」を詠む詩のあることが知られ、三方詩にはこのような神仙世界の景物として「錦巖」が詠まれていることは明らかである。

また、万葉集においても、

時に、雪を積みて重巖の起てるを彫り成し、奇巧に草樹の花を綵り発る。此を属て掾久米朝臣広繩の作れる歌一首「于時、積雪彫成重巖之起、奇巧

綵発草樹之花。属此掾久米朝臣広繩作歌一首」

石竹花は秋咲くものを君が家の雪の巖に咲けりけるかも(19)四二三一)

遊行女婦蒲生娘子の歌一首

雪の山斎巖に植ゑたる石竹花は千世に咲かぬか君が挿頭に(19)四三三二)

と見える。ここでは、造花を飾った雪でつくった「重巖」をめぐる和歌の唱和があるが、この「重巖」が神仙世界の景物と見なされていることは、既に辰巳正明によって指摘されている。<sup>17)</sup> この例からは、「巖」を神仙世界の景物とする表現が懐風藻に限らないことが知られる。福麻呂歌集歌においても、懐風藻詩に見られる景物描写と近似した表現を見るのは、両者に交流のあったことを推測させるのであり、神仙世界の装いをまとった花や巖の春景を用いたと考えられるのではないだろうか。

#### 四 結

以上によってまとめらるるならば、次の三点になる。

(一) 福麻呂歌集所収の恭仁京讚歌は、人麻呂の吉野讚歌に見える山川の神の奉仕の様や大宮人の様を描くこととは異なり、春秋の景を描くことへの偏りが見られる。これは単に春秋の景物を描いたのみ

とは考えられず、恭仁京を特殊視した問題からあらわれたものと思われる。

(二) この特殊視する態度が叙景表現に偏りとしてあらわれたのであり、春景について見ると、これは懐風藻漢詩に見られる山水の表現を継承するものではあるが、さらに具体的には山田三方の「三月三日曲水宴」の詩と非常に近似するところに特徴がある。殊に「巖には山した光り 錦なす花咲きををり」の表現は、中国漢詩と対応するというよりも、三方の「錦巖飛瀑激 春岫擘桃開」を強く意識した表現ではないかと思われる。

(三) 懐風藻に見られる「巖」は基本的に神仙世界を意味するが、山田三方の「錦巖」もそれらと共有し、さらに錦の形容によって特殊化されているものである。そのことから言えば、福麻呂歌集の恭仁京讚歌は天皇を神仙と見、恭仁京は神仙的世界と意図されたことが推測される。

このことから、福麻呂歌集の恭仁京讚歌は、それまでの離宮讚歌や宮都讚歌とは大きく異なった讚歌であると考えられる。何よりも、この恭仁京讚歌の達成が日本漢詩である懐風藻漢詩との交流をとおしてあらわれたと考えるならば、万葉和歌の新たな側面として考えなければならないと

思われる。

なお、ここでは、春景について主として取り挙げてきた。一方の対となる秋景についても取り挙げなければならない。後日、改めて考えてみたい。

#### 注

(1) 万葉集の引用は基本的に講談社文庫本の訓による。ただし、「百樹なる」については、本文に「百樹成」とあり、一般に「百樹なす」「百樹もり」と訓読される(講談社文庫は「百樹なし」)が、元暦校本右轄片仮名訓(別行平仮名訓はない)や紀州本、細井本の訓に従って「百樹なる」の訓を採る。

(2) 別冊国文学『万葉集事典』の「対句事典」によれば、四句以上を一連とする「長対」にあたり、万葉和歌において類例の少ない形であることが指摘されている。

(3) 反歌においては春の景物が詠まれているので春に詠まれた可能性も捨てがたいが、ひとまず長歌の論理として一年を示すために春と秋とを並列に詠んだものと考えておく。

(4) 大宮人の姿を「景」として捉えることが天皇讚美の様式としてあり、宴の発展過程と宮廷歌人の位置とを統合的に位置づけた卓論として森朝男「景」としての大宮人」(『古代和歌と祝祭』有精堂 一九八八年)があり、人麻呂の三六歌はこの指摘の通りに解釈できる。

- (5) 「叙景」の語が近代的概念として成立していることは、野田浩子「叙景歌」の成立へ」（『古代文学講座2 自然と技術』勉誠社 一九九三年）に詳しい。また、この語が「景」や自然を無前提に存在したかのように見せる点など問題の多い語であるが、「叙」という行為の側へ重きを置いてこの語を用いることにする。なお、私の言う「景」とは森の言う大宮人などは含めない自然の風物のことであり、視覚によって確認されるそれに限定することなく、広く聴覚的な要素も含んだ概念である。したがって、「鶯の来鳴く」や「さ男鹿の妻呼ぶ」などもそれに含めることとする。
- (6) 神野志隆光「聖武朝の皇統意識 覚書」（新日本古典文学大系『続日本紀二』月報）
- (7) 和銅六年六月二三日条に元明天皇の行幸が見えるのを始めとし、和銅七年閏二月二二日条、靈龜元年三月一日条、同年七月一〇日条、神龜四年五月四日条の聖武天皇の行幸などが見える。
- (8) 金村の反歌の場合、叙景へ傾いてはいるものの、それが特定の季節の景物となっていないことが、福麻呂歌集歌との違いとして注目される。
- (9) 中西進「清き河内」—吉野歌の問題—『万葉集の比較文学的研究』（中西進万葉論集 第二巻）講談社 一九九五年
- (10) 辰巳正明「万葉集と山本水文学」『万葉集と中国文学 第二』笠間書院 一九九三年
- (11) 懐風藻の引用および番号は古典文学大系による。
- (12) この詩の「翠」と「紅」とは「松巖鳴泉落、竹浦笑花新」（二八 大神高市麻呂「五言從駕應詔一首」）によってそれぞれ松と花を具体的に指す。
- (13) 中村喬「中国の年中行事」（平凡社 一九八八年）など。なお、日本における展開については倉林正次「饗宴の研究（文学編）」（桜楓社 一九六九年）などに詳しい。
- (14) 詩の引用は中華書局『先秦漢魏晉南北朝詩』による。なお、訓読は私に付した。
- (15) 「懐風藻の『吉野詩』の表現—神仙境の景物としての「巖」を中心に—」（『中国文学論叢』九号 一九八三年）
- (16) この「岫」は、梅花序にも「夕岫結霧」と見え、「岫」の語が神仙世界を示す語であることは、藤倉明雄「岫」について」（『懐風藻研究』創刊号 一九九七年九月）が指摘している。
- (17) 「風景論—松風の音と重巖の花について」（『万葉集と比較詩学』おうふう 一九九七年）
- 〔付記〕本稿は平成十年度上代文学会大会（平成十年五月十七日 於常葉学園短期大学）において口頭発表した原稿を元に文章化したものである。席上、貴重なご意見を賜った各位に深謝申し上げる。